

# 井上円了と実証主義

柴田隆行

*shibata takayuki*

はじめに

船山信一は明治哲学史を区分し、その第一期を明治三年から一五年までの「実証主義の移植」の時期とし、第二期を一五年から二二年までの「観念論と唯物論との分化」の時期としている<sup>(1)</sup>。船山によれば、第一期の哲学は実証主義であり、「実証主義は観念論と唯物論との分化以前の立場」である。続く第二期の特徴は、「前期における実証主義が一方観念論へ純化され、他方それに対立して唯物論への傾向が現れて来た」ことにある<sup>(2)</sup>。明治始めに実証主義が日本に入ってきた理由は、「当時の日本の社会的条件が実証主義を要求し且つ可能にした」こと、そして哲学が実証主義であった<sup>(3)</sup>こと、「当時の日本の社会的条件が実証主義を要求し且つ可能にした」こと、そして「日本の伝統的思想、つまりとくに儒教、及び国学＝神道、さらには仏教にも実証主義がある」ことにある<sup>(4)</sup>。第一期の代表は西周であり、西はオランダに留学し、そこでコントやミルらの実証主義を学んだ。井上円了は第二期に属する。このように船山は指摘する。ただし、船山は前掲書増補版収録の補遺論文で、井上円了も広義の実証主義に含まれると言う。

観念論のもう一人の代表者である井上円了もその現象即实在論、形而上学的傾向にもかかわらず、またむしろその現象即实在論のために、一方物質不滅、勢力恒存、因果永続、進化（大化・輪化）論等の自然科学的理論を——たとえ形而上学的恣意的に解釈しまた批判するという形においてではあっても——吸収し、他方——もつともこれは前のこととも関連するが——仏教における一種の実証主義によって、実証主義——経験批判主義——を含んでいた。（4）

ここで船山が、井上円了も含めて明治前期の哲学が広義の実証主義に含まれる理由として、「明治初年におけるコント、ミル、スペンサー、さらにヘッケルなどの西洋実証主義の受容」とともに「明治以前の日本の伝統思想、国学・儒教・仏教における実証主義的要素にもよる」（5）と指摘している点は注目に値する。

## 第一章 実証主義とは何か

そもそも実証主義とは何か（6）。

実証主義は欧米語の *positivism* の邦訳語である。船山は前掲書でこの邦訳語の沿革を紹介している（7）。それによると、西周は『百学連環』（一八七〇年）で *positive philosophy* を「実理上哲学」と訳し、『生性発蘊』（一八七三年）では *positivism* を「実理学」「*positive philosophy*」を「実理哲学」と訳している。中江兆民は『理学沿革史』（一八八五年）で *positivism* を「実理学」と訳し、『理學鉤玄』（一八八六年）では「著実派」、『続一年有半』では「限実派」と訳している。井上哲次郎は『哲学雑誌』第一二三号掲載論文で「実験論」と訳し、一九一一年の同誌掲載論文では「積極論」と訳している。井上哲次郎等編『哲学字彙』（一八八一年）では「実

「驗理学」、同一九一二年版では「実証論」「実理論」「積極論」、朝永三十郎『哲学辞典』（一九〇五年）では「実証論」「実験論」「積極論」と訳されているという。補足すれば、井上円了は「実験哲学」ないし「実驗学」と訳し（『哲学要領〔前編〕』（一八九三年）、清沢満之は『西洋哲学史講義』（一八九九〜一九〇四年）で「正面哲学（正定哲学）」と訳している。これらを見ると、「実証主義」という言葉は一九〇〇年以降に使われ始めた訳語であることがわかる。『明治のこゝろ辞典』によると、天保八年（一八三七年）に出た『舎密開宗』に「近時七色ヲ越列機ノ両極ニ配シ紅ヲ積極（ポシチフ）トシ萵花色ヲ消極（ネガチフ）トス」という一節があるそうだが、「越列機」とはエレキすなわち電気を意味し、ここで言う「積極」「消極」は今日の「陽極」「陰極」であり、これは中国語に由来する。（8）

西周は、一八六九年に起稿した『学原稿本』と題する論理学書のなかで、「命題を得たるとき再び様と量との考へに反ることあり様の考にて肯定を表テといひ否定を裏ラといふ」と述べ、また『百学連環』では、「positive result 陽表効及び negative result 陰表効にして直に其用たるものを知り、又其不用なるものを知るなり」、「negative knowledge なるものは positive なるものと相関係して是の真理を知るときは彼の真理にあらざるを知り」[Auguste Comte [中略] 其第一の場所とは theological stage 即ち神学家、第二は metaphysical stage 即ち空理家、第三は positive stage 即ち実理家」と書いている。さらに、『明六雑誌』第二三号（一八七四年）掲載の「内地旅行」と題する小論には、「先ツ内地旅行ヲ行ツテ利ノアル方ヲ積極（ポシチーフ）ト見、害ノ方ヲ消極（ネガチーフ）ト見ルデゴザル」という表現も見られる（9）。

さらに語源を遡ろう。英語の positive はラテン語の positivus に由来し、「置く」「植える」「立てる」などを意味する動詞 pono を語源とする。pono の名詞 positio は「置く」とのほかに「場所」「位置」「主題」などの意

味を有し、英語では position となる。「与えられた事実に基づく」という意味で positive という言葉が使われるが、これはその語源「置く」の受動形「置かれた」「設定された」に由来し、一七世紀に神によって設定された自然法則として使われたが、その後「神によって」がはずされ、神ぬきに事実として置かれていと理解された。麻生建他編『羅独・独羅學術語彙辞典』（哲学書房、一九八九年）によると、一八世紀のドイツでは positivum は bejahend「肯定的」（バウムガルテンら）、bestimmend「規定的」（ライマールス）、positiv（ヴォルフ）setzend「措定的」（フロベシウス）と独訳されていることがわかる。現在のドイツでは positiv という形容詞は「肯定的返事」「好影響」「陽画」「陽性反応」「正数」などとして使われ、positives Recht は「実定法」、positive Philosophie は「実証哲学」、positive Behauptung は「確固とした主張」という意味で使われている<sup>(10)</sup>。positivism という言葉はフランスの社会主義者サン・シモン（Claude Henri de Rouvroy, Comte de Saint-Simon, 1760-1825）が最初に使い、その弟子のコント（Isidore Auguste Marie François Xavier Comte, 1798-1857）が広めたと言われる。コントは一八三〇年から四二年に講義録『実証主義講義』（*Cours de philosophie positive*, Paris 1830-42）全六巻を公刊し、実証主義の元祖と見なされているが、そのルーツは彼の師であるサン・シモンに見られる。サン・シモンは「社会組織についての試論」（一八〇四年頃草稿）で、

十七世紀はニュートンを生んだ。十八世紀には厳密科学が大進歩をとげた——迷信的な考えが粉碎された。十九世紀には何が起ころであらうか。社会組織の科学が実証科学（une science positive）になるであらう。その理論は、コンドルセによってなされた一般的考察に基礎をおくであらう。

と述べる(11)。一八一〇年の『新百科全書——趣意書の役を果たす第一分冊』では、

すべての科学は、その理論的部分においてさえ、観察にもとづかなければならない。それゆえ、歴史の分析が、分類の科学たる一般科学の理論の基礎にすえられなければならない。

と述べており(12)、明らかにコントの実証主義の先駆をなす。つづく『百科全書の計画——第二趣意書』でも

十九世紀の百科全書を作成する場合に従わなければならない原則は、科学はその全体においてもその部分においても観察に基礎をおかなければならない、という原則である。(13)

この新しい体系は、実証的諸科学に従事する学者たちが、自分たちの発見する自然の諸法則と自分たちの定める道徳の諸原理——すべての人々は、自分の幸福のため、自分の家族および人類の幸福のため、自分の力を用いて——科学的または産業的分野の完成化に努めなければならぬという道徳的原理——を教える権限を与えられる、教会と呼ばれる一つの集団に統合される時に、完全に組織されるであろう。(14)

というように、実証科学を産業者が組織的に展開する計画が立てられる。

「レーデルンへの手紙」(一八一一年)にも、

科学の全体と諸部分との相関的な実証的性格を調べてみれば、全体と諸部分とが初めは推測的性格をもたざるをえなかったこと、次いで全体と諸部分とが半ば推測的で半ば実証的な性格をもたざるをえなかったこと、そして最後に全体と諸部分とが最大限に実証的な性格を獲得するにちがいないこと、がわかる。われわれは今や、特殊諸科学をうまく要約すれば実証哲学をつくり上げることができている状態にある。(15)

とあり、これは明らかに実証哲学宣言である。

サン・シモンの『産業者の教理問答』の第三分冊(一八二四年)は、弟子のコントが執筆した。コントはこれに「実証政治学大系」という副題を与え、政治学が観察科学の領域まで高められなければならないとして、つぎのような目論見を立てる。

第一の目的は、まさに、一方において、実証科学とみなされる政治学に広くいきわたるべき精神を明らかにし、他方で、かかる変革の必要性と可能性とを論証することである。第二部の目的は、文明の一般的進行を支配した諸法則について最初の概観をし、またその結果として、人間精神の自然的発展が今日支配的なものとするはずの社会体制についての最初の概要を提示することによって、政治学にこの「実証科学的——訳者」性格を与えるべき作業を素描することである。要するに、第一部は社会物理学 (*la physique sociale*) の方法を、第二部はその応用を論じるものである。(16)

だが、こうしたコントの目論見に対して師のサン・シモンは、「この著作は、われわれの体系の一部分しか説

明して」いない、と異論を唱える。

彼〔コント〕は、アリストテレスの見地、つまり、今日物理・数学アカデミーによってとらわれている見地に立った。したがって彼は、アリストテレス的能力をあらゆる能力のうちで最高なものと、唯心論ならびに産業的能力と哲学的能力の上位に立つべきものとみなしたのである。〔中略〕われわれの弟子は、われわれの体系の科学的部分しか扱わず、われわれの体系の感情のおよび宗教的部分を少しも説明しなかった。(17)

だが、コントは師の警告を無視して自らの路線を突き進み、のちに実証主義の古典と見なされることになる大部の『実証主義講義』を著す。この大著で挙げられている実証的精神の要点は、彼の『通俗天文学についての哲学論考』(一八四四年)の巻頭言を単行本化した『実証的精神叙説』で捉えることができる。それによれば、人間は三つの異なった理論的状态にあり、第一が神学的、第二が形而上学的、そして第三が実証的である。実証的状态の原理は事実のみである。

われわれの実証的諸研究は、「事実存在するもの」(ce qui est)につき、その最初の起原および最終的目的を追求することを断念し、あらゆる分野に於いてそれを組織的に探究しなければならぬが、ただそれだけに止まるのではない。その他なお肝要なことは、現象の実証的研究が、何ら絶対的のものとなることなく、つねにわれわれの構造およびわれわれの状態に相即的(relative)のものたらねばならぬことである。(18)

ただし、事実の観察は個人では限界があるので、「あらゆる真の人間結合 (association humaine) の必然的基礎たる知的共同 (communio intellectuelle)」(19) が必要である。したがって、実証的精神と普遍的良識 (bon sens universel) とは根本的に一致する(20)。コントによれば、「実証的」(positif) という語は、「現実」(le réel)、「有用」(l'utile)、「確定」(la certitude)、「明確」(le précis)、「そして」「消極的」(negatif) の反対、「建設する」(organiser) という意味を持ち、さらに重要なことは「絶対」に対して「相対」(le relatif) を含意することである。観察される「事実」の背後にいかなる原理や根源も認めないということが実証主義の要であり、同時にその「事実」自体が絶対的なものではないと認めることが肝要である。

この問題に関連して、実証主義を社会科学方法論として総括した富永健一の著作(21)を瞥見しておきたい。富永によれば、実証主義は「合理主義・科学主義・反宗教・反形而上学の立場を最終的に集約したもの」(22)であり、その特徴は「(一) 認識における客観主義 (相互感覺性・相互主観性の確保)、(二) 普遍的経験主義、(三) 経験と論理の二元論、(四) 測定とデータ処理の科学的手続きの重視、(五) 科学的認識の価値・理念からの自由、(六) 科学一元論」である(23)。サン・シモンは観察された事実を強調するだけで、そこから理論を構築する方法論を欠いていたが、それを指摘したコントの方法論は、J・S・ミルの帰納法論理にまで練り上げられなければならない。だが、個別的経験的データを一般化させるには推論の規則が必要である。この規則ないし論理は経験的なものではなくア・プリオリなものである。

そもそも、データ分析なしに経験科学はあり得ず、そしてデータ分析は帰納的な思考過程である。ところがその帰納的な思考過程が、演繹論理の助けを借りることなしには成り立ち得ない。(24)



サン・シモンからミルまでの古典実証主義の論点が富永の指摘する通りであるとすれば、それはかつてフランシス・ベーコンの経験論と帰納法論理では科学が成り立たないとしてガリレオ・ガリレイが数学と幾何学を導入したのと同じ事態であり、議論は振り出しに戻った感がある。

最後に、実証主義に関する二つの事典項目を見ておきたい。

一つは、大庭健他編『現代倫理学事典』（弘文堂、二〇〇六年）の伊藤邦武筆による記述である。伊藤は実証主義をコントが創始したものとし、コントの『実証主義講義』の「三段階の法則」を紹介する。そして、コントは「実証的な知識を評価して神学や形而上学の無効を宣言したわけであるが、一方では現象の単純さ複雑さによる諸科学の相違ということを強調して、物理的な現象と社会的現象は単純さにおいて両極にあり、これらを扱う科学は互いに還元できないものであると考えた」のに対して、コント以後は、実証的研究方法を共有する諸科学が「互いに還元可能なものに組織化されるべきである、という考えが有力になり、そこから「科学が知識の最高段階であり哲学も科学的であるべき」で「形而上学は擬似科学であるため廃棄されるべきである」という立場が鮮明になった。この代表が功利主義と論理実証主義であると言う。この規定に従うかぎり、井上円了と実証主義との接点は小さい、ないしは、接点はないように見える。

二つ目は、健在だった頃のソ連の教科書を思い出させる、小松攝郎編『哲学小事典』（法律文化社、一九五五年）の記述で、筆者は不明である。それによると、「実証主義は物質存在を「超経験的存在」として退け、唯物論を観念論とともに形而上学だとして非難したが、物自体すなわち物質存在や本質「客観的合法則性を否定するこの傾向が不可知論、相対主義以外のものでなく、「経験的事実の所与」が感覚にほかならず、それがそのままバークリ主義に通ずるものであることは自明であろう。「科学」を表看板にした信仰主義」とは蓋し適評である

う。」とし、「実証主義は一九世紀以来の労働運動と唯物論の勃興に対する思想反動として形成されたものである。」と評している。

実証主義に対して、かたや厳密な科学主義への展開可能性を見、かたやコントを「人類教の祖」とし反動思想として葬り去ろうとしている。後者の紋切り型の評価はいまや通用しないとしても、実証主義があらゆる理論を否定する傾向が一時期あつたことは事実である。だが、富永健一が強調するように、実証主義が学問方法論の一つである以上、実証主義はその論理的普遍化・一般化を不可欠の要素として持たざるをえないであろう。

## 第二章 井上円了の実証主義

日本にいち早くコントの実証主義を導入した西周は、『生性発蘊』で次のような注目すべき記述をおこなっている。この書は、ルイスの哲学史 (George Henry Lewes, *The Biographical History of Philosophy*, 2 vol. 1845-46) の超訳であるが、右の点を考える参考になる。

夫レ現今ニ在テハ、実学ハ、必ス事実ノ視察上ヨリ、立ツヘキコト、人々皆一致スル所ナリ、然モ、其視察、唯一端ニ在テ、是ヲ以テ、學術ノ根元トナスコトハ、曾テ有サル所ナリ、蓋シ確定シタル理ノ講究ハ、總テ視察ニ本ツクヲ、必トスト雖モ、其視察ヲナス前ニ、既ニ多少、理ノ講究ヲ要ス、是レ相待ツモノナリ、故ニ、若シ見象ヲ觀スルニ当リ、是ニ依テ、多少ノ道理ヲ、理會シ得ルニ非レハ、各自ノ視察ヲ合シテ、是ヨリ工夫ヲ施スコト、能ハサル耳ニ非ス、又之ヲ記得スルコトモ、能ハサルヘシ、如此クナレハ、其切要ナル事実ハ、屢々吾人ノ、知覚ニ及ハサルコトアルヘシ、故ニ、理ノ講究モ、亦屢々已ム可ラサルニ出

テテ、事実ノ視察ハ、必ズ理上ノ講究ヲ待テ、始メテカヲ得、而シテ正シキ理上ノ講究ハ、必ス正シキ視察ヲ要スルナリ

斯、理上ノ講究ヲナスニハ、事実ノ視察ヲ要シ、視察ヲナスニハ、講究ヲ要シテ、両々相待ツ者ナル也

すなわち、実証哲学は事実の観察を基にするが、その前に理論を考究する必要がある、というのである。

井上円了は『哲学要領「前編」』で哲学史を講じているが、その第五節はコントの概説にあてられている。実証主義は次のように紹介されている。

実験外にわたる諸説はことごとくこれを排斥し、事物の本体、起原等は到底我人の知るべからざるものなれば論ずるを要せずと断定して、形而上に関する諸思想は一としてこれを用いず。しかして我人の論ずべきものはひとり実験の範囲内にありと唱えて、理学に基づきて哲学の組織を構成す。イギリスの今日の哲学者の多く実験に基づき哲学の解釈を与うるは、けだし氏の主義によるものなり。(26)

清沢満之も「西洋哲学史講義」でコントを取り上げ、その三段階説を紹介したあと次のように述べている。

第三は、此の現象世界の変化の原因は神なるか、或は固有性の独立してあるものなるか、其等のことには注意せざるなり。只だ現在に観察実験して認められることにて、事物の関係を説明するなり。故に原因と云ふが、亦た別に勢力と云ふ様な考を造らざるなり。只だ事物が前後に継起相続し、又左右に相依共存する順

序を説くのみなり。此に至れば、原因結果と云ふことも、連続すると云ふことはなきなり。並列共存せるのみなり。(27)

井上円了も清沢満之もコントの実証主義が経験的事実のみを原理とする点を強調するが、コントが実証精神を「普遍的良識」と言い換え、あるいはそれが「あらゆる真の人間結合の必然的基礎たる知的共同」である点には言及していない。だが、この「普遍的」な「良識」ないし「知的共同」という観点こそ、実証主義の歴史を論理実証主義にのみ導くのではない、別の可能性を示唆しているようにわれわれには思える。

円了は一九〇九年に公刊した『哲学新案』で哲学における経験を重視する発言をしている。

つらつら考うるに、哲学の立脚地を経験の上にとるも、その経験中にすでに物心の両存を予想せざるを得ず、またその起歩点を思想の上に定むるも、思想自体がすでに経験の結果たるを免れず。(28)

思想は経験の結果にほかならないというのは実証主義の原点である。だが、経験が物心両存を「予想する」とはどういうことか。物心がなければ経験が成り立たない、すなわち、経験は物心を前提とすると解釈するならば、経験以前に物心が存在するでなければならぬ。経験に先だつ物心の存在を認めるならば、それは実証主義の否定であろう。

故に余の総合は、物界も実在せり、心界も現存せりとし、物心両界を起点として、絶対に向かつて進み、

その結果絶対の実在を立証し、これと同時に物心両界も現立し、物心の実在するは絶対の現存するゆえん、絶対の実在するは物心の現存するゆえんの断案に到達し得たり。(29)

円了によれば、絶対は物心の現存を前提とする。物心から絶対に向かうのであって、絶対が物心の前提となるわけではない。その物心の現存は経験によって得られる。思想は経験の結果である。だが、経験は物心の存在予想を必然的に伴う。予想はするが、あくまでも物心の実在は経験の結果によって得られる。

吾人は耳目等の感官を有す。これすなわち心内より身外をうかがうべき唯一の窓なり。しかしてこの心窓に映じきたる対境を客観という。この客観界の真相を観察するは、余のいわゆる外観なり。もし客観の大初にさかのぼり、いかにして世界の開発せしか、いかにして万物の生起せしかを究明するは、縦観にして、目前の世界を解剖分析し、その体のなにもより成るかを開説するは、横観なり。(30)

外観は宇宙の一面の所見にすぎず、「更に内界すなわち心内の方面」を観察しなければならない。この作業を内観という。しかし外観内観を総合し、それに表観と裏観を加えて、最終的にはそれらいつさいを総合集成的な相含論に至らなければならない。こうなると、実証主義も非実証主義も論外となるので、話を戻すことにしよう。

一八九四年の「妖怪学講義卷ノ一」(第三版、一八九七年)総論第五〇節では方法論が述べられている。円了によれば、「世の妖怪は因果の原形の誤りより生ずるにあらずして、これを事実の上に応用するの誤りより生ず

ること、すでに明らかなり」という。これを解明する方法は論理学の帰納法であり、それには、契合法、差異法、合同法、残余法、共変法の五種ある<sup>31)</sup>。この詳細な検討は省略するが、この方法論を駆使して世のいわゆる妖怪を分析すると、それは真正の妖怪ではない。仮怪がほとんどであることがわかる。仮怪は妖怪と心怪に分けられ、妖怪は物理的妖怪の略称で鬼火や不知火など、心怪は心理的妖怪の略称で奇夢や霊夢のことである。これら妖怪と心怪の間にさらに物心相関の妖怪があり、コックリ、催眠術、魔法、幻術などである<sup>32)</sup>。妖怪をさらに分類すると、物理学的妖怪（光線の反射屈折等より生ずる変象のごときもの）、化学的妖怪（諸元素の包含分解によりて生ずる変象のごときもの）、天文学的妖怪（彗星、流星のごときもの）、地質学的妖怪（化石、結晶石のごときもの）、動物学的妖怪（熱田の鶏の類）、植物学的妖怪（下加茂の柀の類）等々となり、心怪も、外界に現ずるもの（幽霊、鬼神、悪魔、天狗の類）、他人の媒介によつて行うもの（巫覡、降神術、人相、墨色、九星、方位、卜筮、祈禱、察心、催眠の類）、自己の身心上に発するもの（夢、眠行、感通、神通、幻覚、妄想、諸精神病の類）の三種類に分けられる<sup>33)</sup>。

このように最新の学問的な成果を受け入れて妖怪を説明するならば、それは必然的に「経験的説明法」とならざるをえないと円了は言う<sup>34)</sup>。物理的妖怪も心理的妖怪も経験的説明法で解決できる。だがそれでは説明できない妖怪があるのであって、円了はこれを「真怪」と呼ぶ。

ところで、人知発達時代の第一期は感覚時代である。

感覚時代とは、万有の解釈を与うるに、吾人の感覚にて見聞し得らるる、形質上のもののみによりて説明を与うる時代なり。けだし当時の人知いまだ無形無質のものを考うるに至らず、一切の事物はみな感覚以

内、経験以内にとどめ、たとい物心の二元あるを知るも、ともに有形質のもの信じ、物質上の説明を与えり。」(35)

第二期は想像時代である。この段階になると、有形質のほかに無形質の存在に気づき、「経験以外に無形世界を想立するに至る」。無形世界は心的世界にとどまらない。「鬼神も死後の世界も、みなこれを無形として想像する」。感覚時代には風雨山川みなそれぞれその霊があると考え多神を信じたが、想像時代にはそうした多神を無形的に考えるだけでなく、「多神の上さらに一神あると想定するに至る」(36)。

第三期は推理時代であり、虚構や想像を交えず確実な推理によつて有形無形を考察する。これがすなわち「今日の学術時代」である。この段階に至つてまだ妖怪にふりまわされるとすれば、それは迷誤にすぎない。迷誤が生じる原因を取り除くにはつぎの点に注意すれば良い。

第一、世間に伝うる妖怪は、ことごとく事実として信拠すべからざること。

第二、知識、学問の進むに従つて妖怪の減少すること。

第三、論理作用の誤謬によりて妖怪を生じ出すこと。(37)

要するに、実証主義の精神による諸事の考察を円了は推奨していると捉えることができるだろう。しかし、実証主義の精神では説明できないものごとがお存在する(それが円了の言う「真怪」である)と円了は考える。それは、従来一般の実証主義の定義からすれば容認しえないことであろう。

だがまた否定接続詞を重ねることになるが、ものごとを現実の生活過程から捉え、さらにそれらを成り立たしめていく根源を説明することで、偽怪、誤怪、虚怪、仮怪が学問的に除去しようとしても、柳田国男が全国各地を歩いて明らかにしたように、これらの妖怪はなお人びとの日常生活から完全に払拭することは不可能である。別の言い方をすれば、円了の言う真怪は、これら偽怪、誤怪、虚怪、仮怪とはどこか別のところにあるのではなく、むしろ真怪と偽怪等々が渾然一体としてあるのが常民の生活世界の真相であろう。そのことをおそらく円了自身も知っていたがゆえに、彼は全国行脚の際に各地の民俗調査を行ったのである。円了は全国津々浦々を歩き訪ねたが、それは、妖怪とは何であるかについての啓蒙的な講演をするためだけではなく、彼は、人びとが恐れまた敬っている妖怪とはどのようなものであるかをそれこそ実証主義的に調べたうえで、その真相を説明しようとしたのである。

『日本周遊奇談』（一九一一年）を見ると、円了が、日本を代表する民俗学者の柳田国男にけっしてひげをとらないほどに全国津々浦々で民俗調査をしていることがわかる。そのごく一例を挙げるならば、寒地の酒・醬油、北海の離れ島、日薩肥の天気予報。ふくろうの鳴き声、蚊の名所、豆の話。あるいは、北海道の馬、馬車の渡船、犬税。山水温泉、名称旧跡、名物七奇。町村の珍名、火風の有無。衣服飲食に関し名物うなぎ、ふぐの異名。異様の風呂、仏壇の位置等、神社と森林、寺院の奇名、五島のヤソ教徒、犬神の勢力、河太郎の怪、友引の俗説、山神の相談。大島の産婚、八丈島の葬式、田畑の輪耕、淡路の結髪、鬪牛、隠岐の盆踊り。同姓同名、各地方の方言、お月様の童謡、諏訪系取り歌、江州の儉約、娑婆の地獄、笑門福来、四国遍路、オソメ風、蕎麦の薬味、寝言の効能、果ては糞紙の代用について、等々。民俗学事典の項目を見るようなさまざまなことがらを円了は現地のみならずから見聞して記録している。



また、『おぼけの正体』（一九一四年）では、横浜の人魂騒ぎ、不知火の説明、稲荷の祟、怪獣退治、魔境の話、幽霊灯台、天狗の呼び声などが記録され、『迷信と宗教』（一九一六年）では、離島の迷信、四国の迷信、北海の迷信、全国共通の迷信、怪火、天変、天狗、幽霊、迷信の利害などのほか、西洋やロシア、インドの迷信にまで話が及んでいる。井上円了の名著の一つである『妖怪学講義』全六卷（一八九六年）はまさにこうした実証主義的精神に基づく調査研究の総決算として存在する。そして、これほどここまでに実証主義的な調査・解明の努力を重ねてもなお明らかにしえないことがある。それが真怪であると円了は言う。

『真怪』という著作は、一九一九年六月六日に井上円了が旅先の大連で客死するその約三ヶ月前の三月一六日に公刊された。ここで円了はあらためて虚怪と仮怪と真怪を区別して、世間に伝えられる「千妖百怪の疑團」は科学的に容易に解明することができるが、物とは何か、心とは何か、あるいは時間や空間の限りなさについてといった問題はまさに真怪の名に値し、これは容易に解くことができず、「幽玄の深雲の中に入りて、一步も進むことができず、知識もはねつけられ、道理も自滅してしまふ」（38）と言う。そして、「迷雲を払って真月を見よ、妄眼をぬぐって真怪に接せよ」という句を残して、円了は他界する。

ものごとを物で説明したり（唯物論）、心で説明したり（唯心論）することは容易だが、では物とは何であり心とは何であるかとさらに問うならば、これは容易に答えることはできない。そうしたものは、まさにおのずからあるがまま・なるがままの自然だと言うことができる。哲学の実践家であり仏教の実践家であった井上円了は、学者や仏門僧侶とはならず、哲学と仏教を日本において活かす〈場〉として教育の道を進んだ。そして円了が最後に行き着いた教育の場は、「万物万端を備具せる大学校」であり、廣大無辺のこの世界すなわち自然であった（39）。

「星辰も教師なり、山川も教師なり、ないし禽獣虫魚、木竹草苔みな教師ならざるなし。その範圍無限といふべし。」

西周は、ルイスの哲学史を参考にしつつコントの実証主義を日本に紹介したが、西によれば、実践哲学は事実の観察を基にするが、その前に理論を考究する必要があるという。井上円了においては、事実の観察と理論の考察とは不可分の関係にあるが、さらにそれらの考察をし尽くした先になお解明すべき世界があり、それが真怪である。井上円了の哲学は、実証主義を尽くしたうえで実証主義を超えたところに真怪が存在する、と認めるところからようやく始まる。

#### 【註】

- (1) 『増補版 明治哲学史研究』一九六五年、『船山信一著作集』第六卷、こぶし書房、一九九九年、二八頁。
- (2) 同右三一頁。
- (3) 同右三〇頁。
- (4) 同右四六五頁。
- (5) 同右四六六頁。
- (6) ここでは、円了との直接的関わりが見えない論理実証主義や法実証主義は除外する。
- (7) 船山信一、前掲書六七～六八頁。
- (8) 惣郷正明・飛田良文編『明治のことは辞典』東京堂出版、一九八六年。
- (9) 「肯定的」という言葉を positive にあてる例は当時少なく、一般に「肯定的」は affirmative の訳語として使われた。
- (10) *Positivismus im 19. Jahrhundert. Beiträge zu seiner geschichtlichen und systematischen Bedeutung.* Hrg. von Jürgen Blindorn und

- Joachim Ritter: *Frankfurt am Main 1971* に、フォン・ケンプスキが提示した論題 (Jürgen von Kempski, *Zum Selbstverständnis des Positivismus*) に対して討論が展開され、イルディングがまず実証神学と自然神学に触れて *positiv - natürlich* の対比を挙げ、さらに討論参加者が *positiv - negativ*、*positiv - naturalis*、*positiv - idealis*、*das Relative - die Spontaneität* 等々の対比を挙げている (S.27-37)。<sup>9</sup> *positive* と *negativ* 言葉の哲学的応用範囲を調えるに議論が尽きなく。
- (11) 『サン＝シモン著作集』第一巻、森博訳、恒星社厚生閣、一九八七年、八七頁。以下、サン＝シモンからの引用は森博訳による。
- (12) 同右二二二頁。
- (13) 同右二三五頁。
- (14) 同右二五七～二五八頁。
- (15) 同右二八〇頁。
- (16) 『サン＝シモン著作集』第五巻、森博訳、一九八八年、一三三頁。
- (17) 同右一三一頁。
- (18) *Auguste Comte, Discours sur l'Esprit Positif*, Paris 1844, Hamburg 1956, S.28. 田辺寿利訳、岩波文庫、一九三八年、五三頁。
- (19) 同右独仏対訳本 S.54, 56. 同右和訳八〇頁。
- (20) *ibid.* S.92. 同右一一五頁。
- (21) 富永健一『現代の社会科学者 現代社会科学における実証主義と理念主義』初版一九八四年、講談社学術文庫、一九九三年。
- (22) 同右文庫版四四頁。
- (23) 同右一〇一から一〇二頁。
- (24) 同右一三四頁。
- (25) 『西周全集』第一巻、宗高書房、一九六〇年、五一頁。

- (26) 『井上円了選集』第一卷、東洋大学、一九九九年、一四六頁。
- (27) 『清沢滿之全集』第五卷、岩波書店、二〇〇三年、四一一頁。
- (28) 『井上円了選集』第一卷、二八七頁。
- (29) 同右。
- (30) 同右、二八九頁。
- (31) 『井上円了選集』第一六卷、一〇六頁～一〇七頁。
- (32) 同右二二頁。
- (33) 同右八〇頁～八一頁。
- (34) 同右九三頁。
- (35) 同右八八頁。
- (36) 同右九〇頁～九一頁。
- (37) 同右九八頁。
- (38) 『井上円了選集』第二〇卷、五〇八頁。
- (39) 『教育総論』一八九二年。『井上円了選集』第三一卷、四二八頁。